南の風はアンコロンの調べを載せて

汐崎郁代会員

私は2001年11月から翌年2月初頭まで、JICAの初等理数科教育プロジェクトの派遣専門家として、インドネシアのジャワ島に滞在した。バンドン、マラン、ジョグジャカルタの3都市にある教育大学を順に訪問、現地人の物理の先生方に日本から贈られた理科教育用実験機材の使い方を指導するという役目である。

折しもニューヨークで自爆テロ騒動があった直後、「インドネシアはイスラム教国ではないか、行っても大丈夫か?くれぐれも気を付けろ」と友人たちが真顔で心配し、中には白山神社のお護りを贈って下さった方まであった。実際に現地入りしてみると、この国の人々の日常は柔和そのもの、ちょっと知り合えば人懐こく打ち明け話などして、物静かな笑顔を見せる。コーランの教えでは大声で罵り合うことも禁止されているそうで、あるとき空港で見かけた光景は印象的であった。待合室の隅に二人の男がしゃがみこんで話しているうち、段々二人の声が大きくなり、やや声高に口論し始めたと見るや早速警察官がやってきて、二人を引き立てた。一人が、「なんでもないよ、話しているだけだ」と言い訳している様子だったが、有無を言わさず連行されて行ってしまった。私はこのとき、同じイスラムの教えである「眼には目を」と言う言葉を思い起こした。このように日常の争いを禁じられ、怒りを抑えて暮らしている人々だからこそ、耐え難い屈辱や大きな危害を受けたときだけは、復讐してもよい、と定められたのであろうかと。

仕事は相手のあることなので、現地の人々にはやや暖簾に腕押しの感があり、気ばかり忙しいわりに出来ることが少なくていささか肩透かしであった。そんな一日、プロジェクト本部のあるバンドン郊外の "Saung Udjo" という観光村を訪なう機会があったので、そのことを書かせて頂く。それは南アジアの民族文化を伝承するため、Mang Udjo 氏等が創始した学校兼歌劇団を形成する集落で、古くから用いられたアンコロンその他の民族楽器の演奏と舞踊劇を公開している。近年は現代音楽や外国の曲をも演奏できるように楽器を調整し、積極的な音楽活動を行っている。アンコロンは竹山道雄氏の「ビルマの竪琴」にも登場するし、派遣専門家ならずとも旧日本軍のアジア進出時代を生きた方々ならご存知とは思うが、竹筒の端に孔を開け、竹の棒に数本通してぶらさげてあり、それを振ると各筒が横に渡した竹に当たって高低さまざまの音を出す仕組みだそうだ(菊池俊輔氏のホームページからとった図参照)。単純なものは1台で1音、ドならド、ミならミの音しか出ないので、各自にそれぞれの音程のものを持たせて大勢でメロディーを作っていく。Udjoでは幼児を含む子供たちが勉強しており、客の前で音楽や舞踊を披露して呉れる。ジャワ式の敷物の上に腰掛けて、澄んだ素朴な音色やエキゾチックなリズムにのんびり耳を傾けていると、プログラムの後半に至って幼い団員が観客一人々々にアンコロンを配り始めた。指揮者が自分の音を指示するたびにそれを振り鳴らせというのである。観客一人ひとりに付き添った童女(童子)にうながされてそれを振るうち、なにやら懐かしいメロディーが自分たちの手で作り出されていく。稚拙ながら数曲を演奏し終わったときは、一同感激である。最後は子供たちに舞台の真ん中に連れ出され、ダンスを踊らされる羽目になる。年齢とともに踊る機会など無くなってしまった私たちも、しまいにはすっかり童心に帰らされ、楽しませてもらった。

有名なラーマーヤナなどを見ても、日本の歌舞伎に通ずるところもあり、アジアの文化は我々の背景であると実感せざるを得なかった。

ジョグジャカルタ王宮の歴史物語の踊り手

菊池俊輔氏のホームページから

英語が上手でとても勤勉な秘書のティカさんの愛娘、インタン

任国あんなこと！こんなこと！ その1

●ラオス近況二題 （足立久美子会員）

1. 首都ビエンチャンでは交通手段はオートバイが一般的になりつつあります。朝は通勤ラッシュもところどころ出てきました。そのオートバイですが、老若男女（小学生ぐらいから）、3人/4人乗りで、乗り回している姿が見られます。ラオスの女性は、シンというラオス伝統のロングスカート姿で乗っている人もいますが、短いスカート・短パンも多くなっています。そして特に気になってしょうがないことは、ほとんどの女性に共通するのですがサンダル履きの姿で、しかもサンダルがハイヒールなのです。それでバイクに乗っている女性が多いので驚きます。上手いことクラッチペダルと足置き場（?）をハイヒールで操っています。もちろん事故も多いみたいです。

2. 夕方になるとちょっとした広場でエアロビクスをしているラオス人のグループが増えました。ここでは日本のような「室内」で、ということが可能な建物が無いのかどうか、ほとんどが屋外ですがいちおう屋根らしきものがあるところで行っています。スコールがきても大丈夫な場所です。健康ブームもあるせいか?若い人から年配の方まで特に女性が多いです。スタイルは、Tシャツにスパッツ・運動靴。リズミカルに踊っています。でも、その場所に来るために多くの人は、オートバイに乗ってきます。

●タイ　タイ料理といえば激辛だが・・・（笹山弘会員）

タイ料理といえば辛い、それもとんでもなく辛い。というのが多くの方のイメージではないでしょうか。たしかに辛い料理が多いのですが、タイの人々が皆辛い料理を食べているわけではありません。こどもたちは全く辛くない料理を食べていて、大きくなるにつれ、少しずつ辛いものに慣れさせていきます。大人でも、北部・東北部の人たちは激辛を好みますが、他の地方はそれほどでもありません。特に最近のバンコクの若い世代はむしろ辛いものを苦手にする人が増えています。他国の料理になれてきたせいかと思いますが、私のC/Pのひとりも辛いものが苦手。タイ料理の辛さに慣れてしまった私があまり辛くないと思う料理でも、「辛くて食べられない！」と泣いていましたっけ。ちなみに彼女は日本食が好きで、寿司とコンビニのおにぎりが好物。タイに唐辛子が根付いて百年ほど、残念ながらあと百年すると辛い料理が消えてしまうかもしれませんね。